
世界と錬金術士

火具土

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界と錬金術士

【Nコード】

N5481X

【作者名】

火具士

【あらすじ】

無と有を操る者、錬金術士。永きに渡って世界を救ってきた者達。故に行き着く先には困難が多い。これは、重い錬金術士の宿命を背負った男と魔法少女達の物語。

全ての始まり（前書き）

始まりは、なのは撃墜（11歳）の時から

全ての始まり

「なのは！ オイツ！ しっかりしろよー！！」

「ゴホツ… ヴイ… ヴイ… タちゃん… …… ごめ… …… んね」

「バカッ！ しゃべんじゃねー！！」

胸を一突き、しかも貫通して獲物が抜かれた所為で、血が止まらずに次々と溢れてくる。

咳き込むと、ドロドロとした血がなのはの口から吹き出てくる。

クソッ！あたしのせいだ！なのはの体は限界だったのに、無理やりにも止めなかったわたしせいだ！！

「医療班はまだなのか？！ 応急処置にも限度があるぞ！！」

「そ、それが… 高町教導官の前に、医療班が他の場所に向かってしまったため…」

「チイツ！ なら治癒魔法を使えるヤツはいねーか？！ ヘタクソでもいい！ 血を止めねーと…」

血の流しすぎで、なのはの顔が青くなってきたやがる！このままじゃ…なのはは……いや、ぜってーさせねー！！

鉄槌の騎士ヴィータは、いくつもの困難を乗り越えて来たんだ！これくらいで諦めるもんか！！

そんなあたしの意志とは裏腹に、なのはの血が止まらない。まるでなのはの命そのものが流れてくるみたいで…恐ろしくなった。

いつの間にかなのはの目は閉じられてて、体も冷たくなってきて……

もう、ダメなのか……？なのはは…なのはは……！！

「おい、聞こえるか？　しっかりしろ！」

「……え？」

聞き覚えのない声に顔を上げると、知らねー男があたしの反対側にいた。武装局員も気づいていなかったようで、焦り気味に武器を構える。

それでも男は怯まない。それどころか、背中に背負っていたデッキ―剣を投げ捨てた。

「こちらに敵意はない　これでよろしいか？」

「あ、ああ……」

「傷は……かなり深いな…傷を負って何分になる？」

「え、えっと…約10分ほどになります」

「道理で衰弱しているはずだ 棺桶に片足どころか、半身突っ込んでいる状態だ 後5分もすれば死んでるぞ」

男の言葉に、あたしは恐怖のどん底に突き落とされたような気がした。

なのはが……死ぬ…？

「なのはッ！！ 起きろよ！！ 目を覚ませよ！！！！」

「落ち着け」

「落ち着いてられっか！！」

死にかけの人間を目の前にしてるのに、冷静な男の胸ぐらを掴んで、真っ正面からガンを飛ばす。

けどコイツは、そんなあたしの目を見ても怯まなかった。逆にあたしが怯まされる。

ポンッ ナデナデ

「落ち着いたか？」

「あ、ああ…すまねー…」

「気に病むな この子はお前にとって大事な存在なんだろう？」

うう…！なんかわかんねーけど、コイツは信用してもいいんじゃないかねーか？

あたしの騎士としての勘が、そう訴えてくる。それになんともなくだけど、コイツならなのは治してくれる気がした。

「大丈夫だ、ちゃんと治してやる」

あたしの心を見透かしたようなタイミングで、男がそう告げてきた。なんか…ズリーくらいにカツコイイな、コイツ…

男はあたしになのはを抱いているように言うと、男の持ち物であるう袋を漁り始めた。

「…あつた」

取り出したのは、妙な装飾の施されたビン(?)らしき物。ただ、中身は見えない。液体なのは間違いないと思う。さっきからピチャ

ピチャ音してるし…

蓋を開けると、なのはの口元にくっつけて中身を飲ませようとビン
を傾ける。けど、なのはにはもう飲み込む力もないみたいで、口の
端から液体がこぼれた。

「なのは……頼むから飲んでくれよ……！」

「仕方あるまい……」

すると、男がビンの中身を自分の口に含んだ。これからコイツが何
をするのか、この時のあたしにはわからなかった。

後になって考えても、コイツのこの行動を止めるべきだったのか、
止めなくて良かったのか、あたしには理解出来なかった。

だって、あたしはこういうのを見るのは初めてだし、されたことも
ねーから。

「…ん」

男がビンの中身を口に含むと、なのはの唇に唇を合わせた。あまり
の衝撃的な光景に思考が硬直してしまう。

後ろに立ちすくんでいた武装局員も息を飲んでいたので、コイツら
にも予測出来なかったんだろうよ。

コクンッ

なのはが液体を飲み込んだのを確認すると、男は唇を離した。その時に、なのはの唇と男の唇の間に細い糸みたいのが見えた気がしたけど、気にしないことに……いや、気にする余裕がなかった。

パアアアアン

「な、なんだ…?!」

すぐに、なのはの胸元（リンカーコアか？）から小さな白い花火みたいのが吹き出て、キラキラとなのはの体が淡く光った。

光りが収まった時には、もうなのはの傷は治ってた。バリアジャケットも修復されてたし…何者なんだ？コイツ。

なのに、男の表情は険しい。

あたしの心が不安に駆られる。

「なあ…？　なのはは治ったんだよね？　もう、大丈夫なんだよね？」

「ケガは治した…が、いかんせん血を流しすぎたようだ　このままじゃ意識を取り戻さない」

じよ、冗談だろ……？せつかく治したのに、目覚めないなんて……
…でも、コイツならまだ…

あたしは藁をも掴む思いで、男に視線を送った。男はポケットを漁って、何かを探しているようだった。

そして徐に取り出したのは、薄ピンクのガラスの破片みたいな物。

「アイオン！」

呪文か、それとも誰かの名前かわからねーが、男が声を上げると、空中に男の持ったガラスの破片と同じ色のガラス玉を持った女が現れた。

だけど、かなりちつちえー。あたしよりも一回りちつちえー。しかもプカプカ浮いてやがる。ラインみたいな存在なのか？

「なんじゃ？ 妾は眠たいのじゃが…」

「そう言うな この子に命を吹き込んでやってくれ」

「…仕方のない主じゃ」

そう言うって男の手からガラスの破片モドキを受け取ると、握りしめ

自らの口元に持つてくる。

そしてその手に握ったガラスの破片モドキに、フーツと息を吹きかけた。

すると粉末状になった破片モドキが、なのはの体に吸い込まれるように消えていく。同時に、なのはの顔が血色のいいものになってしまう。

男は言った。

「安心していい これでもう大丈夫だ」

緊張の糸が切れたあたしは、力が抜けて情けなくも涙が出てきてしまった。しかも部下の前で。

だけど、男が壁になつてくれたから泣き顔は見られなかった。泣き声は聞こえてたみたいだけどな。

「では、俺はこれで」

「あ ちょっと、待てよ！」

あたしが泣き止んだのを見計らって、男が立ち去ろうとした。それをあたしが制する。

「なのはを助けてくれたから、アンタがここで何をしているとか、何者かは聞かぬ」 けど、一つだけ教えてくれ」

「何だ？」

「アンタ、名前は？」

あたしの質問に、男はフツと顔を綻ばせた。

「メリヒムだ　メリヒム・メリヤス・ウリス」

「あたしはヴィータ　メリヒム、なのはを治してくれてありがとう
な」

あたしのお礼を背中で受けたメリヒムは、ふと思いついたかのように何かをあたし目掛けて放り投げてきた。

これは… 宝石？でもなんだか魔力があるような…

「俺に用が出来たら、それを砕くといい　必ず駆けつける」

「わかった、じゃあな」

メリヒムは袋を担いでどこかに歩いていった。なんか、風来坊みて

ーだな。

メリヒムが見えなくなったところ、ようやく医療班が駆けつけた。かなり焦ってた様子だから、大方報告を聞いてとんぼ返りしてきたんだろう。

でも、もうメリヒムが治しちまったから患者はいねーわけで、骨折り損のくたびれもうけってわけだ。

あたしらは意識のないのはを連れて拠点である観測基地へと戻った。

だけど、なんでメリヒムはこんなところにいたんだろ？焦ってたとはいえ、あたしにも武装局員にも気づかれなかったし…

ま、次に会ったときに聞けばいいか。今はなのはが優先だ。

|| || || || || || || || || || ||

重傷だった少女を治療した後、俺は街の北の方に位置する大きな建物へとやってきていた。

「あ、メリヒムさん お疲れ様です 今回の『世界』はどうでした？」

「ああ、なかなか危険なところのようだ　行ったそばから、胸を刃物で一突きされた少女に出会った」

「：わたしには詳しいことは聞かされてませんが、気をつけてくださいね？　あの人、メリヒムさんになら、何をしてもいいと思ってる節がありますから」

「心配は無用だ、アナ　それに、俺はアイツの人形じゃない　断る時には断るさ」

受付のアナ　本名、アナストラ・セルヴァティカと世間話。そしてさらに奥へ。

「あら？　メリヒム、あんた戻ったの？」

「……………（スタスタ）」

「ちよつと！？　無視しないの！？」

「おお、フェニル　あまりの小ささに見えなかったぞ」

「キイイイツ！！　そこまで小さくないわよ！！」

「椅子に立たないと見えないのだから、十分小さいとおもうが？」

もう1人の受付のフェニル　フェニル・ニート（12歳）を弄り、この建物の最奥へ。

俺の身長の2倍以上ある扉を押し上げる。そこは、ステンドグラスの大きな窓が備え付けられた書斎。

書斎の中央には、金髪を靡かせて振り向いた1人の美女が存在した。

「お帰りなさい　今回はどうだったかしら？」

「断定は出来ないが、今まで見てきた『世界』とはどこか違う」

「それは私の命令を受けたメリヒム個人として？　それとも『錬金術士メリヒム』としての？」

「……………今回は『錬金術士』の方だ」

「なるほど……………それは穏やかじゃないわね」

この建物の長　ノエイラ・マーテルの顔が真剣なものになり、
緩い空気の代わりに重苦しい空気だけが部屋に満ちる。

それだけ『錬金術士』　特に俺の『錬金術士』は重要であり、影
響力あるものなのだ。

「無茶な真似だけはしないでね？　私はもう、知り合いが死ぬのは
いやなのよ」

「フツ、お前はそんなに弱い女じゃなかるう？　それに戦いがある

以上、命の駆け引きもある　そのことはお前も重々理解しているはずだ」

「わかってるわ　私はそれをわかってる上でお願いしてるのよ」

「…またお前は難題を突きつける　ハア…わかった　俺も犬死ににするつもりはないからな　いざという時は、仲間を頼るさ」

「いい男はいい女の言うことを素直に聞くものよ」

ノエイラの言葉に苦笑しながら俺は書斎を後にした。

さてと、おそろくヴィータはあの子が目を覚ましたら俺を呼ぶだろうから、あまり没頭しないものを研究するでしょう。

全ての始まり（後書き）

ま、プロローグだし、こんなもんかと。

目安としては1話辺り6000〜8000くらいに抑えたいです。

第1話

ヴィータView

なのはが墜ちて2日。なのはは運ばれて2、3時間で目を覚ましたけど、色々調べるために検査入院した。

はやてやフェイト達にも連絡はしたけど、仕事を片付けてから向かって言ってたから、多分今日辺りに来ると思う。

だけど、当の本人は

「ヴィータちゃん、もう大丈夫だから」

「ダメだって！ シヤマルも言ってたろ　なのはの体の芯には疲労が溜まってるんだって」

体がなんともないから退院するって言って聞かない。だから、今はあたしがお目付役だ。

でも、なのははガンコだから困る！少しは自分の体を大切にしろって。

あ、そうだ。メリヒムも呼んでおこう。メリヒムからも何か言ってくれば、なのも引き下がるかもしれねーし。

「アイゼン！」

グラーフアイゼンを起動させ、ポケットに突っ込んでたメリヒムからもらった宝石を取り出す。

「ヴィータちゃん？」

「よっ おりゃあー！」

宝石を放り投げてアイゼンのスイングがヒット。宝石は粉々に砕け散った。

あたしの行動にビックリしてるなのは、目をぱちくりさせてる。この後に、もっとビックリしなきゃなんなくなるんだけど…教えてやんねー。

言うことを聞かねーのはは、はやて達の前で辱めを受ければいい！

「うっ……なんかイヤな予感がするの……」

20分くらい歩いただろうか？俺の前には崩れかけの遺跡が存在した。

ここは普段立ち入り禁止の場所だが、ノエイラの許可を得た俺は入ることが出来る。イコールそれだけ危ない場所、もしくは一般人に認知されてはマズいものが存在する、ということである。

この遺跡は後者に当たる。

俺としては、ノエイラが気にするほどのものではないと思うが…アイツにも色々不安要素があるのだろう。

そのうち歩むべき道が無くなる。要は行き止まりというわけだが…俺にとっては行き止まりではない。

壁に描かれた2匹の蛇が絡まっているモチーフに手を当て、魔力を注ぐ。

すると注がれた魔力が壁一面に張り巡らされ、人1人がくぐれるくらいの穴が現れる。それこそが、世界を渡る入り口となる。

穴の中に入った途端、なんとも言い難い感覚に陥る。が、2秒もするとその感覚は消え去り、地に足が着く。

さて、感覚の赴く方へ行くとしよう。見舞いの品は何が良さだろうか？

|| || || || || || || || || || ||

なのはView

「なのはッ！ 大丈夫?!」

「にははは 大丈夫だよ、フェイトちゃん 心配かけてゴメンね、大事な時なのに…」

「ううん、なのはの方が大事だから」

「相変わらずやなあ、フェイトちゃんは もう、わたしはごちそうさまや それはそうとなのはちゃん、ヴィータはどないしたん？なのはちゃんの監視してたんちゃうんか？」

フェイトちゃんが病室に飛び込んできて、わたしの心配をしてくれ。その後ろからはやてちゃんやシグナムさん達が続いて入ってくる。

フェイトちゃんの予想通りと言える反応に苦笑いがこぼれる。けど、はやてちゃん。監視はヒドいの……せめて見張りとか…あまり変わらないかな？

そしてはやてちゃんの疑問に上がったヴィータちゃんは宝石(?)を砕いて数分は病室にいた。

けど、その後「ちょっと外に行ってくる けど抜け出すんじゃないぞ！ 抜け出したら、アイゼンでポッコボコにしてやっからな！！」って息巻いてどこかに行っちゃった。

その旨をはやてちゃんに伝えると、はやてちゃんも首を傾げてた。どうやら、はやてちゃんにもわからないみたい。

「しかし高町、聞いていた話と違うのだが…私達はお前が不意打ちで胸を一突き、しかも貫通するほどの重傷を負ったと聞いた だが見たところ、そのような傷はおるか、掠り傷一つないように見える これはどういうことだ？ 情報が間違いだっただけか？」

「そのことなんです…正直なところ、わたしにもわからないんです…」

「…どういことなん？」

「敵が不意に現れて、後ろから一突きされたところまでは覚えてるんだけど…その後は記憶が曖昧なの ヴィータちゃんが、武装局員の人達に大声で怒鳴ったりしてたのは、うっすらと覚えてるんだけどね…」

ヴィータちゃんに聞いても適当にはぐらかされちゃうし、そのときいた武装局員の人達に聞いても、ヴィータちゃんに口止めされてるから言えないって、教えてくれないし。

「うーん、謎やなあ… ヴィータは回復系の魔法は苦手やし、武装局員の中にシヤマル並の治癒魔法の使い手はおらへんやろし…」

「なんにせよ、ヴィータだけが事実を知ってるってことだね」

うーん、わからないの。誰がどうやって治したのか、なんでヴィータちゃんが教えてくれないのか。

「あ、はやて もう来てたんだ」

「ヴィータ、どこ行って…えっと、どちら様？」

けど、その疑問もすぐに解決したの。ヴィータちゃんが連れてきた人によって。

その人は男の人で、シグナムさんよりも身長が高くて、髪の色が夕日みたいに鮮やかな赤色で、ツンツンに髪の毛が立ってた。

顔もスゴく優しそうで、フェイトちゃんやシヤマルさんがよくするスツゴく安心する笑顔を、わたしに向けながら病室に入ってきた。

その人は、はやてちゃんの問いに答えるように頭を下げると自己紹介を始めた。

「初めまして、メリヒム・メリヤス・ウリスと言っ」

「メリヒムはあのとき、なのはを治してくれた人だ！」

ええっ！？この人が、わたしを治してくれた人なの！？

「どうだ？ 体に違和感などはないか？」

「え、は、はい！ もう全然、なんともないです」

「だからって、すぐに現場復帰しようとするのはいただけねーよな？」

うう…：ヴィータちゃんが、いつになくイジワルな気がするの…：そして、フェイトちゃん達も苦笑いしないで欲しいの。

「フッ、元気が有り余っているようだな 医者としてはなによりだ」

「医者？ メリヒムって医者だったのか？」

「ああ、ちょっと特殊な医者だ」

特殊？ってことは…

「メリヒムさんも魔導師なんですか？」

「…似たようなものではあるな　だが、『も』というのは…？」

「ヴィータちゃんから聞いてないんですか？　ここにいるわたしたち全員、『時空管理局』に勤める魔導師なんですよ」

「ほう…その齡で役所勤めとは……して『時空管理局』とは一体どんな組織なんだ？」

え！？管理局を知らない！？

フエイトちゃんやはやてちゃん達も、その切り返しは予想だにしていなかったみたいで驚きを露わにしている。

そこからはみんなでメリヒムさんに、管理局の説明をすることになった。その際にみんなで自己紹介を済ませた。

管理局はミッドチルダという都市が中心となって設立した数多に存在する次元世界を管理・維持するための機関であり、通称「管理局」と呼ばれていること。

警察と裁判所が一緒になった様などころ」で、ほかに文化管理や災害の防止・救助もおもな任務としていて、わたしたちはお手伝いをしていること、など。

小難しい話しだったけど、メリヒムさんは頭がいい人みたいですぐに理解してくれた。これにはビックリなの。

それからわたしが正体不明の敵にやられた時の経緯を、ヴィータちゃんと一緒に話した。

「なるほど、大体の経緯はわかった。だが、何故あなるまで誰も止めなかった？　なのは自身も、疲労が蓄積していたのは理解していなかったのか？」

「あたしらはちゃんと止めるよう言ってたけど、なのははガンコで聞かねーんだ」

ヴィータちゃん言葉の言葉を聞いて、みんなの顔を見るメリヒムさん。フェイトちゃんやシグナムさん達は、みんな困ったような表情で頷いてた。

そこでメリヒムさんがわたしをジッと見てくる。何も言ってくれなかったけど、目が物を言ってた。「なんでだ？」って。

しばらくは無言が続いたけど、いつの間にかわたしは口を開いていた。

「わたしは…みんなを守りたいんです　わたしは、わたしの力で救える全てを救いたい　そのためにも休んでいる暇はないんです」

「それは立派な志だ　だからこそ、体を休めることも大事なのではないか？　例えば今回の一件　たまたまお前が傷を負うという結果だったが、もし刺されたのがお前ではなくお前の守りたい者…仮にヴィータしよう　蓄積された疲労により、お前の反応が遅れたがためにヴィータが刺された　これはお前の自己管理のせいにならないのか？」

「違うんです 疲労とかじゃなくて、ただわたしが弱いから… だからわたしはもっと強くなるために、救いを待つ人のためにこれくらいで休んでちゃいけないんです!!」

パンツ！

何をされたかわからなかった。右の頬がヒリヒリして、心がスゴく痛くて、なんだかわからないうちに涙が溢れてきて…

その歪んだ視界にメリヒムさんが左手を振り切った姿と、みんなが驚いた顔がかるうじて写った。ああ…わたし叩かれたんだ。

「なのは、お前は忘れていないのではないか？」

「ヒック…なにをですか？」

「ここにいるのはお前の仲間だろう？ お前はみんなを守ると言うたが、その目的のために仲間を頼らないのは、仲間に対する裏切り行為なのではないか？」

「そんなッ！？ ッグ…そんなことありません！」

「お前がそう思っていて、相手はそう思わない コイツらは、お前が無理をしてまで守らなければならぬほど弱いのか？ 力があるのに助けられない これが、どれだけ辛いものなのか お前が一番知っているんじゃないのか？」

力があるのに助けられない…それはものすごく辛いし、悔しいこと。昔、お父さんが大怪我したときがあった。そのときお兄ちゃんはスゴく悔しそうだった。

そうだ…今のわたしは、あのお兄ちゃんにそっくり。強さだけを求めて、周りを見ないで突っ走ってた。

そのときのわたしは、お兄ちゃんが怖くて近寄れなかったけど、お姉ちゃんはお兄ちゃんとお母さんの心配ばかりしてた。

結果的にお父さんが退院して元に戻ったけど、あのままだったらどうなってたんだろう…？想像もしたくない。

そんなわたしの心境を悟ったかのように、メリヒムさんが言葉を続ける。

「経験や反省は、同じ過ちを繰り返さないためのものだ。今回の経験、次に生かせるな？」

「…………ツ（コクン）」

「よし、いい子だ」

ポンポンと頭を優しく叩かれると、ポロポロと涙がこぼれてきちゃった。なんでメリヒムさんの言葉は、こんなに気持ちいいんだろう？

けど、今のわたしにはそんなこと言う余裕もなくて、ただただ泣きじゃくるだけだった。

「なのは」

「フェイトちゃん…今までゴメンね」

「いいの、なのはが認識を改めてくれたから メリヒムの言うとおり、同じ過ちをしなければいいんだから」

「せやで、なのはちゃん 次からはちゃんとわたしらを頼ってや？」

「そうじゃねーと、今度こそアイゼンでポッコボコにしてやっからな！」

「はやてちゃん…ヴィータちゃん…グスツ……ありがとう」

フェイトちゃん、はやてちゃん、ヴィータちゃんのため押しに声がこらえきれなくなってきちゃった。

「……………」

視界の端に無言で病室を出て行ったメリヒムさんが写った。もしかして、わたしに気を使ってくれたのかな？そうだとしたら、申し訳ないな。

それからわたしは大声で泣いた。今まで溜め込んだものを全て、涙で洗い流すかのように。

「一緒に慰めてやればいいものを」

「そういうわけにもいかんだろう 子どもと言えど相手は女 初対面の男が軽々しく涙を見るのは良くない」

「フツ、お前のような男がまだ世の中に存在したとはな」

病室の外で、シグナムとメリヒムがこんな会話をしていたとか。

|| || || || || || || || || || ||

メリヒムView

病室から泣き声が聞こえなくなり、数分おいた後、俺は再び病室へと赴いた。

中では、なのはがフェイト達と顔を見合わせて微笑みあっていた。

どうやらすっかり和解したようだ。少々、目が腫れぼったくなっているが、スッキリした様子。

最初に俺の顔を見て、ハツとした表情をしたのははやて。

「せや！　なのはちゃんの話ですっかり忘れとったけど…メリヒムさんは、どうやってなのはちゃんを治したんや？」

それを聞いて、ヴィータを除く皆がハツとした表情になった。こちらとしては、答える義務はないので追及されなくても良かったのだが…

「特に特別なことをしたわけではない　俺の携帯していた回復薬を飲ませただけだ」

「でも、あの飲ませ方はな…」

「……飲ませ方？」「……」

ヴィータが言いよんだのを見て、ピーンときた様子なのははやて。どうやらはやては、勘や相手の感情の機微に敏感なようだ。

次いで、フェイトが顔を赤らめた。確信は持っていないが、おそらくは…というところだろう。彼女も勘が良いと言える。

残りのなのはとシグナムは、わかっていないようだ。なのはは前者

2人と同じ年だが、このくらいの年頃の子では普通、予想がつかないだろう。

シグナムはおそらくだが、そういう話しに疎いだろう。アナとそう変わらない年で、皆目見当もつかないというのは普通じゃないからな

「アイゼン、あのとときの映像を」

「J a w o h l .」

ヴィータが誰かに命ずると、中空に絵が浮かび上がった。その絵はなのはの胸が血で染まり、ヴィータが必死になって傷口を塞いでいるものだった。

「これから流す映像は本当にあったことだかな！ 現実逃避すんなよ！」

「う、うん」

なのはが頷いたのを確認すると、ヴィータが『アイゼン』とやりに「再生して」と命じた。すると中空に浮かび上がった絵が、音を発しながら動き始めた。

確か古い錬金術士に、こういった技術を開発した者がいたな。これも似たような技術なのだろう。

場面は進み、俺が薬をなのはに飲ませようとしているところへ。こまでの流れを見て、はやてとフェイトは確信を得たようだった。

「やっぱりそうなんやな」

「主はやて?」

「ううう〜 ヴィータ、お願いだからこれ以上は…」

「ダメだ! もう二度と無茶しねーためにも、徹底的にブツ叩く!」

「フェイトちゃん、顔が真っ赤だよ? それに、はやてちゃん 笑顔がとっても不気味なんだけど… それとヴィータちゃん もう絶対にしないうって約束したでしょ?」

そんなやりとりの間にも、絵は先に動いていく。場面は俺が薬を飲ませようとして、なのはを抱き上げているところ。

ニヤニヤと女らしくない、イヤらしい笑みを深めるはやて。アワアワと手で顔を隠しているが、指の隙間が開いていて、そこから動く絵を見ているフェイト。

そして、俺が口に含んだ薬をなのはに…

「にゃあああああああああああああああ!?!?!?!?」

「うわっ、うわぁ…」

「おっほお！ ずいぶんとディープにいくんやなあ！」

「は、破廉恥なッ…!？」

「ま、こうなるよな」

口移して飲ませたところで各々が大きく反応した。そして薬が効力を発揮、なのはの傷が癒えたところで絵は消え去った。

「にゃあッ!？ にゃあッ!？ にゃあああッ!？」

ポフンッ

そんな音と共に、顔が真っ赤になったのはが気絶した。俺が駆け寄り揺り起こすと、俺の顔を見るや否や、再び顔を真っ赤にして気絶する。

また起こすとまた真っ赤になって気絶する。

「いや、今日はええもん見せてもらったわ、ありがとっな、グータ」

「はやてに喜んでもらえたなら良かった」

「いや、良くないから！ ああ！？ またなのはが！」「ダメやで、フエイトちゃん なのはちゃんは、わたしらより一歩先に大人になったんや 言わば、これは後学のための勉強や！」

「後学………それならしょうがないね」

俺となのはの後ろで、フエイトとはやてがそんなやりとりをしてたらしいが、俺は全く気がつかなかった。

「にゃああああああ！！！？」

第2話

メリヒムView

「き、貴様アアツ!!」

背後から振るわれた木をかわし、逆に男の背後へ回り込み、無力化する。一種のやりとりに男の父親は目を細め、母親は少々驚いた表情を見せる。

何故、こんなことになっているか。事の発端は数十分前のことだ。

ひとまずなのは落ち着かせた俺は、なのはの親と対面することを望んだ。助かったとはいえ、重傷を負ったという事実は変わらない。

それに見ず知らずの人間が医療行為とはいえ、大事な娘さんの唇を奪ってしまった。どんなに取り繕っても、こうした事実は覆せない。

故に正直に伝えようと思い、なのはと手の空いていたフェイト、はやてを伴い、3人の故郷『地球』の『海鳴市』という場所へとやってきた。

「ほう…ここが？」

「は、はい…そうです」

俺の問いに、なのはが顔を赤くしながら答えた。あれから、頭が爆発して気絶することはなくなったが、俺を見る度に顔を赤くするようになってしまった。

その光景をはやてはニヤニヤしながら見守り、フェイトがはやての顔を見て苦笑い。聞くとところによると、フェイトは管理局で『執務官』という、位の高い資格を取得するために猛勉強の最中らしい。

そんな大事な時間を、こんなことのために割いていいのか？と聞くと「はやてだけじゃ、事実を面白おかしくしそうで心配だから」という、実に友達思いの言葉を頂いた。

なのは先導の下、目についた物の解説を受けながら歩いていると、一件の店らしき建物へたどり着いた。

「ここは？」

「なのはちゃんの家で経営してる『翠屋』ちゅう喫茶店や！このシュークリームは絶品やで！」

シュークリーム云々は置いていて、ここになのはの親御さんがいる

のは間違いないようだ。

カランカラン

ベルの音を鳴らして入り口の扉を開ける。店内は落ち着いた雰囲気で、かなり清潔感に溢れている。しかもどことなく、俺の世界の趣があるように感じる。

「あら、なのは おかえりなさい、今日は早かったのね」

出迎えたのは妙齡の女性。佇まう様がなのはに似ているところから、血の繋がりと見えていいだろう。

「あ、うん ただいま、おか「大変だ母さん！ なのはが…って、なのはあ！？」お兄ちゃん？」

焦った様子で飛び込んできたなのはの兄らしき人物によって、目の前の女性が母親だと判明。だが、目の前の女性がなのはの兄を産んだとは思えない。

なのはの兄は低く見積もっても18くらい。40近い人の若々しさではない。どちらにせよ、俺にとってはさほど重要なことではないが。

「どうしたの恭也？ なのはの顔見て驚くなんて」

「あ、ああ…今さっき、リンディさんから連絡があったんだ。なのはが重傷を負って運ばれたって」

「あ、あのねお兄ちゃん。そのことなんだけど…」

「なのはが重傷を負ったのは事実だ」

横やりを入れるように発言すると、『恭也』と呼ばれた兄と母親の視線が俺に向けられた。兄は威嚇するような目つきで、母親は不思議なものを見る目で。

「あら、ごめんなさいね。お客様をほったらかしにしちゃって」

「お前は何者だ？」

「俺の名はメリヒム・メリウス・ウリス。しがない錬金術士だ」

|||||

なのはView

「ちゃんと報告したいことがあるの」と、メリヒムさんを警戒する

お兄ちゃんを説得し、お母さんはお店を臨時休業にしてくれた。

そして、休業の看板を入り口に掛ける時に、ちょうどお店の前に1台の車が止まった。見覚えのある車だったから、この後の展開も予想できたの。

「なのはああああ!!!!」

「うにゃああああ!!!!?」

車から飛び降りてきたアリサちゃんに、思わず悲鳴が出ちゃったけど、後から降りてきたすずかちゃんの表情を見たら、わたしは何も言えなかった。

だって涙の痕が残ってるんだもの。きつとエイミイさん辺りが、なのはのこと教えてあげたんだろうな。

「なのはッ!? だいじょ…アリサ?」

「なんや、アリサちゃんとすずかちゃんだったんか わたしはてつきり、ヤーさんがなのはちゃんを誘拐しに来たかと思ったで」

「はやてちゃん、『ヤーさん』ってだれのことなの? 安田さん? それとも山本さん?」

「なのはちゃん 『ヤーさん』って言うのは、『や』から始まる3文字の職業の人のことを指す隠語なんやで」

「『や』から始まる3文字の職業……わかった！ 『八百屋』さんだね、はやてちゃん！」

「えーっと……あんな、なのはちゃ そこまでベタなボケされると、逆にツッコミづらいんやけど……」

あれ？ボケたつもりはないんだけどな……でも他に、『や』から始まる職業は思いつかないの……

「アンタらね……わたしがどんだけ心配したと思ってるのー!」

「その心配はもっともけど、抱きつくのは考えものだよ？」

「なんでよ、フエイト」

「だって、なのはがケガしたのって右の胸の辺りだよ？ そんなところ抱きついたりしたら……」

サーッと音がするくらい急に、アリサちゃんの顔が青ざめた。けどね、アリサちゃん。それだけ重傷だったら、なのは歩いてないよ？

でもアリサちゃんはパニックになってるようで、腰に巻きつけてた手をわたしの肩に乗せると、勢いよく前後に揺らし始めた。

「なのはッ！ しつかりしなあさい！ 傷口に抱きついたのは謝るから起きなさいよー！」

「にゃにゃっ、にゃっ！ にゃあっ！」

「ア、アリサツ！ そんな乱暴に揺すったらダメだよ！」

「アリサちゃんったら……でもなのはちゃん、元気そうでよかった」

「アカン……面白すぎやで、アリサちゃん」

アリサちゃんのシェイキングは、いつまでも戻ってこないことを不振に思ったお姉ちゃんが来るまで続いた。うえっ……気持ち悪いの……

|||||

メリヒムView

当初、なのはの親族（土郎、桃子、美由希、恭也）だけに話す予定だったが、予想以上に人数が増えた。

最初は、フェイトの母親だというリンディ・ハラウオンと兄であるクロノ・ハラウオン、そしてパートナーであるエイミィ・リミエツ

夕。3人とも時空管理局の職員のように、なのはが全快しているのを見て驚いていた。

次に、なのはの友人であるアリサ・バニングスと月村すずか、すずかの姉でなのはの兄 恭也の恋人である月村忍。先に挙げたクロノのパートナー、エイミーから連絡がいていたようだ。

最後に、管理局の『無限書庫』という場所から、なのはの魔法の師 ユーノ・スクライアとたまたま手伝いで訪れていたフェイトの使い魔 アルフ。彼ら2人は、モニター（フェイトから教えてもらった）越しの対談になる。

他にも執事やメイドの姿が見えるが、そこは割愛させてもらう。彼らも、進んで話を聞こうというわけではないようであるし。

場所は高町家の道場。これだけの人数が入る場所がここしかなかったためだ。

「さて、これで全員か？」

「そうね これ以上に増えるかもしれないけど、待っている時間が惜しいわ」

「では始めるとしよう 俺はゼー・メルズの錬金術士、名をメリヒム・メリウス・ウリスという」

『錬金術士？』と首を傾げる者が何名かいるが、ここで説明していは話が進まない。よって話を続ける。

「今回、高町なのはの重傷した現場に遭遇　その際、治療した人間だ」

「ちょっと待て」

恭也が俺の次の言葉を遮って発言する。質問は後にして欲しいが、その質問は予想している。

「そもそも、なのはが重傷を負ったというのは本当なのか？　どう見ても健康そのものにはしか見えないが？」

「先ほど恭也と桃子には言ったが、今回のことは紛れもない事実だ」

「本当なのか？　フェイト」

「うん　わたしもはやても現場にはいなかったけど、ヴィータがなのはと一緒にだったから間違いないよ」

初対面の人間より、付き合いのある相手が言った方が信憑性はあるからな。やはりフェイト達に着いてきてもらって良かった。

「でも、変ねえ？　なんで、なのはちゃんも重傷を負ったっていうのは伝わってるのに、治療されて元気になったっていうのは伝わっ

てなかったのかしら？」

「あゝ、リンディさん そのことなんやけど…多分、ヴィータが口止めしてみたいなんよ」

「ヴィータさんが？ 何故かしら？」

「なんでやろうな？」と疑問を口にしながら、はやてが俺の方をチラリと見る。俺に答えると言っんだる。

「俺にヴィータの真意はわからないが、推測は出来る 1、なのはを助けてくれた礼に何も聞かない、という言葉を律儀に守ったから
2、俺の持つ力を、管理局に知らせたくなかったから」

「メリヒムの持つ力…？」

「最初に言っただろう、俺は『錬金術士』 文字通り『錬金術』を使う なのはを治療したのも、錬金術で精製した薬だ 薬の名は『エリキシル』 『エリクサー』 や『エリクシール』 などと呼ぶこともある、錬金術士の中でも作れる者はそうはいない、最高峰の薬だ」

『最高峰』と聞き、皆が息を飲んだのがわかった。特になのは。大方、自分にそんな貴重な物を使って良かったの？とも思っているのだらう。

「気に病むことはない、なのは」

「で、でも…」

「道具は使ってこそその道具だ　いくら貴重であっても、使われなければ道具は道具になりえない　お前が考えるのは過去の過ちではなく、これからの未来だろう？　未来のお前が笑って暮らせていれば、俺はエリキシルを使って良かったと思える　だからそういう顔はするな」

「…はい！」

ニコツと明るく元気に微笑むのは。やはりこの子には笑顔が良く似合う。

ポンッ　ナデナデ

「メリヒムさん　なのはちゃんといちゃついとらんで、話の続き頼むわ」

「にゃっ!?!　にゃに言ってるの!?!　はやてちゃん！　わたしとメリヒムさんは、いちゃついてなんかないよ!?!」

「ん？　ああ、悪い　つい、な」

「にゃあああッ!?!?!」

今ならなのはの顔でお湯が沸けそうだ。目の錯覚かもしれんが、頭

から煙が立ち上っているように見える。

話が脱線したな。戻すでしょう。

「なのは」

「ふえッ!?　だ、ダメだよ!?　そういうのは、ちゃんとお付き合ひしてからじゃないと!?!」

「…何の話をしているんだ?　ヴィータから預かった情報があるだろう?　それを出して欲しい」

「え?　あ…そうだよね!　なにを勘違いしてるんだろっね、わたしは…」

なのはがシユンと落ち込む。先ほどから恭也とユーノの視線が鋭いのだが…何か無礼を働いただろうか?　桃子はニコニコ、はやてはニヤニヤ、士郎は何故か物憂げな表情。

なのはの『レイジングハート』（ヴィータの『アイゼン』と同じような物。総じて『デバイス』というらしい）によって、モニターにあの時の映像が流れる。

なのはが刺され、悲鳴があがる。アリサかすずかか、それとも美由希か。断定は出来ないが女性なのは確か。

血溜まりを広げるなのはを、必死になって介抱するヴィータ。そこに俺が介入。そして薬を飲ませたその時、

「き、貴様アアツ!!」

という叫びとともに背後から刀が振るわれた。冷静に避け、振り切った腕を取り背後に回り込み、関節をキメて無力化する。これが冒頭に記したこと経緯である。

突如起こった出来事に、なのはを筆頭とした子供組が驚いていた。美由希や忍といった恭也に近い人間は、別のことで驚いていたようだ。

「クソツ！ 離せ！」

「お前の怒る理由は理解してあるつもりだが、あの時はああするか手がなかった」

「知るか！ 貴様はなのはの『初めて』を奪ったんだ！ 死んで詫びろ!!」

酷い言いがかりだな……が、妹を大切に思う心は素直に認めよう。なのはが「は、初めてって、そんな……」とか呟きながらトリップしているように見えるが、大丈夫だろうか？

というか、恭也の所為で口移しのシーンを思い出したアリサやすずかの顔が真っ赤になっている。あれが普通の反応だろう。

「では聞くが、お前はなのはに死んで欲しかったのか？」

「なッ！！？」

「俺がたどり着いた時、なのはは半分死にかけていた。あの状態で如何にして救う手立てがあった？ 是非とも参考までに教えてほしいのだが？」

「……………ッ」

苦虫を噛んだような顔で悔しそうにする恭也。残酷かもしれないが、聞いておく必要があった。

覆すことが出来ない歴然たる事実を突きつけたことによって、冷静さを取り戻すことが出来ることもある。

頭で納得しても、感情で納得出来ないのが、人間という生き物だ。そしてそのための方法も考えてある。

「それでも俺を受け入れられないのなら…俺を切るといい」

「な…に…？」

恭也の言葉が詰まり、土郎さんの肩がピクリと小さく動いた。この場に来てから感じていた妙な雰囲気。それが今の一種だけ、僅かに

揺らいだ。

これは士郎の押し殺した鬨気…いや殺気といった方が近いかもしれない。この場で士郎は一度も発言していないが、その実、感情に任せて罵倒しないよう口を噤んでいたように思える。

罵倒の矛先が俺がなのはか、あるいは管理局員のリンディかはわからない。けど、間違いなく士郎は道場中全てを支配下に置いていた。だからこそ俺は士郎に対し、アプローチを掛けた。俺の言葉では聞かなくても、実の親でありおそらく師弟関係である士郎の言葉なら聞くであろう、という俺の目録である。

そして俺の目録通り、士郎が初めて口を開いた。

「聞いても良いかな？ メリヒム君」

「なんだ？」

「何故、キミはなのはを助けたんだい？ なのはと会うのは初めてだし、キミが貴重な物まで使う義理はないと思うんだけど…？」

「医者としての義務、という回答では納得しないのか？」

「では質問を変えよう キミはなのはに口移しで薬を飲ませた時、何を考えていた？」

「回りくどい言い方は、あまり好ましくない それよりも、はっきり単刀直入に言えばいい 『キミは覚悟があるのか？』と」

目が細められ、恭也の握っていた刀を士郎が握り、俺の首元へ向けた。あまりの展開に、なのはやフェイト達が焦りの表情をしているのが、視界の端っこに映った。

「なるほど キミは見た目以上にやるみたいだね」

「士郎のような実力者に誉められるとは、嬉しい限りだ」

「で、返答は如何に？」

「俺は医者でもあるが、1人の戦士でもある。今まで何十、何百と命のやりとりをしてきた。それくらいの覚悟は常に持ち合わせている」

俺の目を士郎がジッと見てくる。多分、ほんの数秒のことだったはず。ふと士郎は首元から刃を引いた。

「ふふふ、どうやらキミの勝ちのようだね 無礼を詫びよう」

「いや、どっちもどっちだろう？ 俺は士郎を利用し、士郎は俺を試した。むしろ、こちらが詫びるべきだ」

「そうかい？ ならこのことは水に流すでしょう 互いに、後の禍根は作らないためにもね？」

「そうしてもらえると幸いだ」

ガシツと力強く握手をする。やはり士郎は、かなりの使い手らしい。握手1つとつても、力の入れ方や握手の仕方などで、大体の強さを察することが出来る。

息が詰まる思いをしていた、なのは達が大きく息を吐いていた。だが、俺はこのとき見逃していた。はやてが、イタズラな笑みを浮かべていたのを。

頃合いを見計らい、はやてが全員に聞こえる声の大きさと爆弾を落とした。

「これってドラマとかでよくあるアレやろ? 『お父さん、娘さんをください!』って言う…」

「ほえ!?!」

「メエリイヒムウウ!!!」

恥ずかしさのあまり、ボンツと爆発したなのは。はやての言葉に乗せられ、刀を抜いて切りかかってくる恭也。

フェイトは「え?」と意味がわからなそうにしており、アリサとすずかは「なのは(ちゃん)、結婚するの!?!」と興味津々。

桃子&リンディは、微笑ましく見守るのみで、士郎は「メリヒム君

第3話（前書き）

今回はメリヒムと高町家のお話。

はやての話し方が激しく不安…

第3話

ゼストView

俺はゼスト・グランガイツ。時空管理局・首都防衛隊の隊長だ。周囲の人間達からは『陸のストライカー』などともてはやされるが、そんなことはない。

確かに俺は自分の強さに誇りを持っているし、部下もそんな俺に文句一つ言わずについてきてくれている。が、俺1人では大したことは出来ない。

友であるレジアスが表に立ち、1番の部下であるクイントとメガ・ヌがいてこそ、俺はこの立場にいても過言ではない。

今回の任務も、友であるレジアスからのものだった。違法研究所の潜入捜査。俺とクイントとメガ・ヌ、幾多の任務をやり抜いてきた部下達からするば、さほど難しい任務ではなかった。

だからこそ、俺ははっきりと言える。

決して『簡単な任務』という予断は持っていなかったと。

「ガフツ…!」

おびただしい量の血が俺の口から溢れ落ちる。俺の腹は深くえぐり取られていた。目の前の相手は右目を負傷し、完全に視力を失っていた。

戦闘機人ツ…！？ここまで強いとは。部下はほとんど死んだか…途中、分かれたクイントとメガー又は無事だろうか？アイツらには、帰りを待っているヤツがいるんだ…死ぬなよ。

「IS『ランブルデトネイター』」

「クツ…！」

戦闘機人によって投合されたナイフが爆発。俺は爆風により、壁を破壊しながら吹き飛ばされた。

ここまでか…

諦めが頭によぎった時、俺の視界に1人の男の姿が映った。その男は俺を見るや、傍に駆け寄ってきた。

「これは…酷い怪我だな 手持ちの物で治せるかどうか…」

この男は俺を治療する算段を立てているようだ。その行動と俺の戦士としての直感が訴えた。この男は信用に値する。

最後の力を振り絞り、男にすがりつくように頼んだ。

「俺は…いい…それ…よりも…俺の…部下を…!!」

「…いいのか？ お前は助からんぞ？」

「構わんツ…！ アイツらを…クイントと…メガー又という女性を…助けて…やって欲しい…頼む…」

「…わかった」

男の了承の言葉が耳に入った。これで2人が現時点で死んでいない限り、助かる可能性が出てきた。なに、俺の部下で1、2位を争う実力を持っている。そう易々とやられるものか。

さて。このまま、ただ朽ちるのを待つも悪くはないが…

「まだ立つのか…あなたのような実力者に、片目1つの代償で勝てたのは僥倖と言つべきか」

「戦闘機人が…もう勝った気か？ 俺を…嘗めるなツ！」

我が身命を賭けて！この運命に最後の時まで抗わせて貰おう！！

「なんでメリヒムさんが!？」

「手伝いだが……意外そうだな？」

「うん、かなり意外……じゃなくて!？ その…そう！ エプロンがとっても似合ってるの！」

危ない危ない、思わず本音がこぼれてたの……ごまかせた…よね？

ポンポンッ

「そうか、ありがとう」

ホッ。よかった、ちゃんとごまかせてたの。

「男がエプロンを着けるのは、違和感があるよな？」

「特にメリヒムさんのは、ものすごく違和感が……」

にゃああああああ!!?!?ハメられたのー!!…!!

やっぱり怒ったかな…?ううう、怒ってるよね?メリヒムさん、優しいけど怒ったら怖そうだもん…

来るだろう痛みに身を固くしていると、額にコツンと小さな衝撃が

朝食を終えた高町家は、それぞれ動き始めた。なのはと恭也は学校へ行き、士郎と桃子は喫茶店『翠屋』の経営。美由希は学校が創立記念日らしく、今日は休みのようだ。よって、翠屋の手伝い。

さて、俺はどうする…1番の候補は、美由希と同じように手伝いをする事。邪魔になることは決まらずだ。聞けば、かなり繁盛しているらしい。人手があって困ることはないだろう。

次に周囲の散策。離れた場所に行くとなると、土地勘のある者を連れ添う必要がある。が、近場なら最悪、誰かに翠屋の位置を聞けば良い。

3つ目。地球ではなく、他の場所へ向かう。これは決して無い。まだ、なのはが完全に回復仕切ったかどうか、判明していないのだから。せめて後2、3日は滞在したい。

最後は、マナのケアをする。ここ数日、マナを働かせたからな。出来れば労ってやりたい。

何故そんなことをするか、と？マナはデリケートな存在だ。機嫌を損ねれば、力を貸して貰えなくなってしまう。マナの力が使えない錬金術士は死んだも同然。ただの戦士になってしまう。

「メリヒム君はどうするんだい？」

「マナ達をリフレッシュさせてやりたいが…あまり人目についても不味い」

「まな？」

美由希、なんかアホっぽいぞ…

「……マナとは『この世のあらゆる事象を司るもの 風火地水、光に闇、星や月、感情や精神 様々な種類はあれど元は同じ、つまり純粋な力の塊』のことを言う」

「…随分哲学的なんだな」

「えっと……つまり？」

「美由希、つまりだな 地震や火事、雷といった自然界にあるものだけではなく、音や光なども根つこの部分は一緒で、メリヒム君はその根つこの部分を、いろんなものにいじれる存在ってことだ」

「まあ、なんだ？ 妖精や精霊のようなものだと思っている」

「なんか、かなりバカにされた気がする…」

士郎の答えは当たらずとも遠からず、といったところ。実際、全錬金術士がマナと契約しているかという点、そうではない。

それに、俺が扱うのはあくまで錬金術。確かにいろいろ出来るが、マナの説明としては些か間違っている。

それでも士郎は順応性が高いという点、目の前の現実をそのまま受

け入れられるようだ。さすが、なのはの父というところか…

「昼間は美由希と共に翠屋を手伝おうかと 人が疎らになる夜にマナをケアしようと思ってる」

「それは助かるね ウチの店は、ピーク時にはかなり忙しくなるから、人手があると楽になるよ 美由希、メリヒム君に諸々を教えてやってくれないか？」

「はい、任せて！」

張り切る美由希に手を引かれる俺。普段、あまり人から教わるということはないが、たまには人に教わるのもいいか。

それから美由希に簡単なレクチャー受け、喫茶『翠屋』は開店した。

俺は前もって美由希に教えてられていた通り、接客をこなす。こうしてみると、意外に忙しいものなのだ、接客というものも。

ほぼ1日中、受付嬢として働いているアナやフェニルも、やはり大変なのだろう。今度会った時には食事でもご馳走するか。フェニルは、素なのかもしれないが…

「ねえ、あの人……新人なのかな？」

士郎がそんなことを考えていたようだが、俺は自分の疑念にいつぱいで全く気づかなかった。

そのうち客で店が忙しくなり、視線など気にしていられなくなった。常に動いている状態だ。一般人にはかなりキツイ労働になるが、士郎、桃子、美由希、それに雇われの人間数人は、アルバイト笑顔を絶やさずにやっていた。

カランカラン

「ただいまー！」

「おかえり、なのは」

「おろ？ メリヒムさんが働いとる？」

「あ、ホントだ」

午後になり、なのはが学校から帰宅。その時に、フェイト達も一緒にやってきた。どうやらアリサとすずかは結構な常連らしく、士郎や桃子だけでなく美由希もそのような対応をしていた。

「御嬢様方、御注文はお決まりでしょうか？」

「アンタがそうかしこまった対応すると、けっこう様になるわね」

「そうだね 燕尾服着てたら執事さんに見えるよね？」

「お褒めに預かり、光栄です」

美由希に教わった通りのやり方だが、間違っていないかったようだ。雇われの人間達とは違う対応の仕方だったから、少々不安を覚えていたが…

「（美由希さん アンタ、とんでもない人間だな…モノホンの執事を持つ人間にお墨付きをもらうとは……………グツジョブや!）」

「（燕尾服って、確かスーツみたいなのだよな？ 燕尾服を来たメリヒムさん…………ぜ、全然違和感ないね!）」

「（うにゃあ…だ、だめッ！ 想像すると顔が熱くなるの!）」

むう…なのはの顔が赤い。まだ体調が整っていないか？心なしか、フェイトの顔も赤い気がするな。

コッソ

「少し熱っぽい…か？」

「ふええええええ!!?!?!?」

コッソ

「フェイトは確実に少し熱っぽいな」

「うえ！？ だだだ大丈夫だから！！？」

コッソ

「なッ！？ なんでわたしにまで！？」

「比較するには、基準となる対象が必要だろうか？」

なのは、フェイト、アリサと順に熱を計ってみた。アリサを基準とすると、なのはとフェイトの2人は熱がある。どうやら2人共、体調が悪いようだ。

ただ、熱を計ってからアリサの顔が妙に赤い。アリサも体調が悪かったのか？さつきから視線を送ってくる客も、何故か騒がしい。

「コソコソ…（はやてちゃん…メリヒムさんって天然？）」

「ヒソヒソ…（かもしれへんなあ…わたしらもまだ付き合いが浅いから、なんとも言えへんよ）」

やはり、俺は何かやってしまっていたのか？

から出てきそつですごく怖かった。

だからみんなに相談したの。そしたら…

「なのはちゃん、それは恋や!」

「こっこここ恋いい!!?」

「な、なのはちゃん 声大きいよ」

ハツとしてみれば、お客さんの視線がわたしに集まっていた。あう…
恥ずかしい…

「はやても、あまり変なこと言わないで」

「変って…ひどいなあフェイトちゃんは 自分の嫁が盗られたから
って、わたしに八つ当たりしないで欲しいんやけど…?」

「嫁え!? ち、違うよ!! わたしはただ、なのはの悩みを真剣
に…」

「はいはい、はやてもそこまでにしましょうね」

ゴンッ!

「イ、イッタア〜ッ！ アリサちゃん、ツッコミがキツすぎるて…」

アリサちゃんのゲンコツが、はやてちゃんの頭に突き刺さった。無防備というか、不意打ちだからかなり痛そうだ。

「なのはちゃん、もうちょっと詳しく聞かせて？」

「う、うん えっと、普段はそうでもないんだけど…ふとした時にメリヒムさんの顔を見ると顔がカアアアって熱くなって、すごく心臓がドキドキして…」

「他には？」

「他は…頭を撫でてもらった時に心があったかくなって、微笑みかけられるとすごく恥ずかしくなる…」

うう…なんか公開処刑されてる気分なんだけど…でもでも！これで理由がわかれば対策もできるように…

「ううん、はやてちゃんの言ったこともあながち間違いじゃないよ
うな…」

「いやいや、すずかちゃん これは間違いなく恋やっつて」

「そうね、わたしもはやてに賛成 フェイトはどう思うっ？」

「ぼおーーーーー……」

あ、あれ？どうしちゃったんだろう、フェイトちゃん？顔が赤くて、目が潤んでて、その視線の先には……

「メリヒムさん？」

「フェイト……アンタ、まさか……！」

「ほえ……？ ちちちち違うよ……！？ こ、これはけっして好きになつたとか、そういうんじゃないから……！」

うわあ……見事に自爆したね、フェイトちゃん。って……？フェイトちゃん、メリヒムさんのこと好きになっちゃつたの……！？

「なのはちゃんとフェイトちゃんの三角関係やね……！」

「んもう！ だから違うんだってば！ ただ、クロノと比べてスゴくお兄さんっぽいなあ、って思ったただだからね……！？」

「まあ、フェイトのその意見には賛成ね……… 鮫島の後継者にしようかしら……？」

「おおっ！ アリサちゃんにもフラグ立ってたかあ……！」

「フラグ言つなあー!!」

ガッツ!

「~~~~~ツ!!?」

さっきのゲンコツと違って、シャレにならない威力だったみたいで、声にならない悲鳴を上げて悶えてるはやてちゃん。まず、音からして違ったからね。

でも、メリヒムさん。まだ付き合いは浅いのに、あつという間にフイトちゃんとアリサちゃんに気に入られちゃった。すごいなあ。

「すずかはどうなのよ?」

「わたし? う~~~~ん、まだよくわからないかな?」

「わたしには聞いてくれないんか?!」

「はやては、多分『おもしろい人』とか言いそう……」

「うっ……!? そ、そんなら順番にメリヒムさんを泊め入ん? 1日一緒に過ごしたら、少しは打ち解けると思っんやけど……」

はやてちゃん、凶星だったんだ。みんなわかってるよ。目が呆れるもん。

だけど、はやてちゃんの見解は賛成かな。フェイトちゃん達だけじゃなくて、シグナムさんやリンディさん達ともお話ししておいた方が色々都合がいいと思うんだ。

みんな、はやてちゃんの見解に賛成で、ジャンケンで順番を決めた。わたしは1日泊めてるから、自然と最後になった。

順番はすずかちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃん、アリサちゃん、わたしの順番。けど、順番を決めてから気づいた。肝心のメリヒムさん本人に、了解をもらえてなかった。でも、杞憂だったみたい。

「俺は別に構わない。むしろ有り難い、と 様々な場所を見て回ろうと思っていたからな」

なんと、あっさり了解の返事をもらってしまった。ビクビクしながら聞いたのが、バカみたいに思える。

というわけで、明日から順番にメリヒムさんがお泊まりすることになった。

うーん、なんとなくだけどイヤな予感が…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5481x/>

世界と錬金術士

2011年10月28日10時06分発行